



「ビーガン／ベジタリアン」と雑食者 がともに織りなす食の実践

中山 広貴

卒論題目：「ビーガン／ベジタリアン」と雑食者がともに織りなす食の実践 ―フィンランド・ヘルシンキの事例をもとに―

著者名：中山広貴

キーワード：「ビーガン／ベジタリアン」、雑食者、共食、「つながり (relatedness)」論、フィンランド

「要 旨」

本研究はフィンランドの首都ヘルシンキでのフィールドワークをもとに、「ビーガン／ベジタリアン」と雑食者 (omnivores) がどのように共食の場を形成しているかを明らかにするものである。

ヘルシンキにおいては、どのレストランに行ってもほとんどビーガン／ベジタリアン料理が提供されており、大学の学食でも毎日提供されている。学食という現場では、肉食をする人がビーガン料理を食べていたり、肉食をする人と肉食をしない「ベジタリアン」の人が同じテーブルで食べていた。このような現場の状況から浮かび上がってきた問いは、肉食をしない「ビーガン／ベジタリアン」と肉食もする雑食者がどのように互いに共食の場を形成しているかということにある。ヘルシンキでは「ビーガン／ベジタリアン」と雑食者との共食の場を見ることができた。ビーガン／ベジタリアン料理を共食することで、人々の関係が深まったり、時には分断したりすることもあった。

本研究ではフィンランド・ヘルシンキでの共食の現場を、エスノグラフィーを用いて細かく描写していく。そしてその際にマレー半島における人々のつながりを研究した人類学者の J. Carsten [1995, 2000] が用いた「つながり」論や、オランダの学生の食生活を研究した E. J. Venn [2023] の提唱した「eating-apart-together (離れつつ、一緒に、食べる)」という概念とともに考察をしていく。

本論文は序章を含め、全 6 章から構成される。

第 1 章では、フィンランドの食文化にふれながら、「ビーガン／ベジタリアン」の歴史的背景、そしてフィンランド、とりわけヘルシンキにおいて普及している「ビーガン／ベジタリアン」の現状について記述する。

第 2 章では、人類学における共食に関する研究の背景を踏まえながら、「ビーガン／ベジタリアン」についての先行研究をレビューし、人類学における食に関する研究の流れをふまえながら、本研究が人類学の研究の中でどこに位置しているのかを明らかにする。

第 3 章では、フィールド調査の概要について記述する。ヘルシンキ大学の学生を中心に調査を行い、彼らが実際に行なっている食の実践を様々な現場を例に出して、丁寧に叙述していく。

第 4 章では、第 3 章で記述したフィールドワークでの内容を分析する。共食の場のエスノグラフィーを分析することで、ビーガン／ベジタリアン料理はビーガニズム、ベジタリアニズムの思想を問わず消費されること、そして「ビーガン／ベジタリアン」と雑

食者が共食する際に、両者とも自身の思想に合う料理を食べ、その思想は互いに強制されないことを指摘する。また共食の場面によってはビーガン/ベジタリアン料理が「ビーガン/ベジタリアン」と雑食者の関係を円滑にすることもあれば、逆にビーガン/ベジタリアン料理によって共食をする人たちの間に分断が生じることもあったという現場の状況を明らかにする。

第5章では、エスノグラフィーの分析をまとめて本研究の結論を述べるとともに、本研究の課題とビーガン研究の今後の展開について考察する。人類学においてビーガン研究はあまりなされてきていないが、身体、障害、アート、フェミニズムという多様な側面からの研究の広がりがあると考えられる。また、その考察をすることで本研究のこれからの可能性を提示する。